新詳 世界史探究

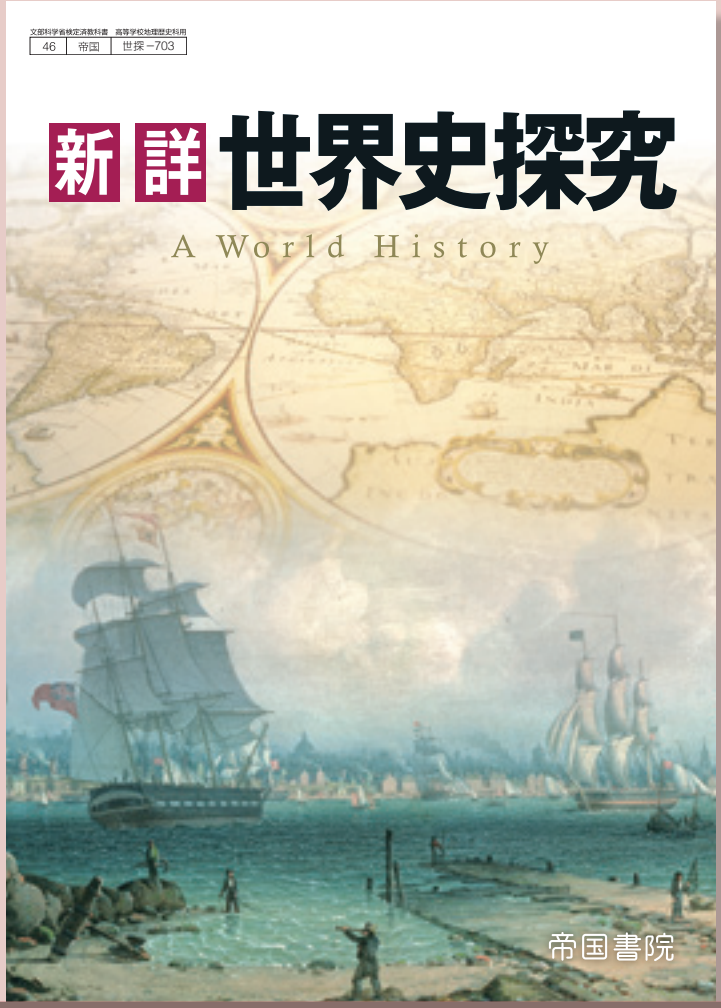
指導資料・関連教材 カタログ

内容解説資料

部分サンプル

世探 -703

- 指導資料Webサポートコンテンツ付 …… p.2
- 教科書準拠ノート …… p.8
- デジタル準拠ノート …… p.10



帝国書院

＊本冊子に掲載している内容は，一部変更となる場合があります。

新詳 世界史探究

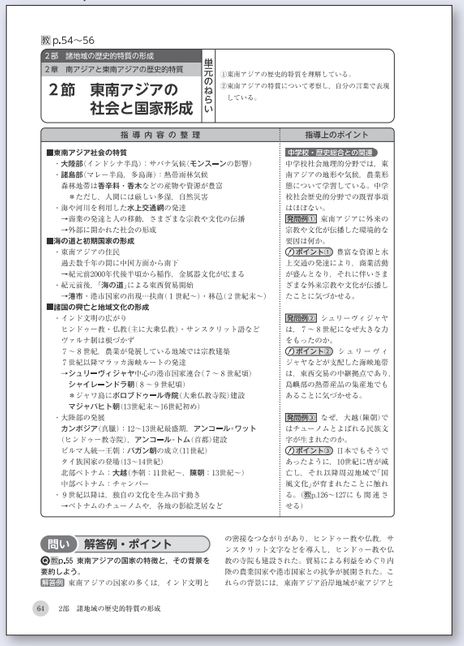
指導資料 Web サポートコンテンツ付

定価：28,600 円（本体 26,000 円＋税） ISBN：978-4-8071-6653-4
内容：（1）指導資料 B5 判 / 360 ページ
（2）指導書 Web サポート

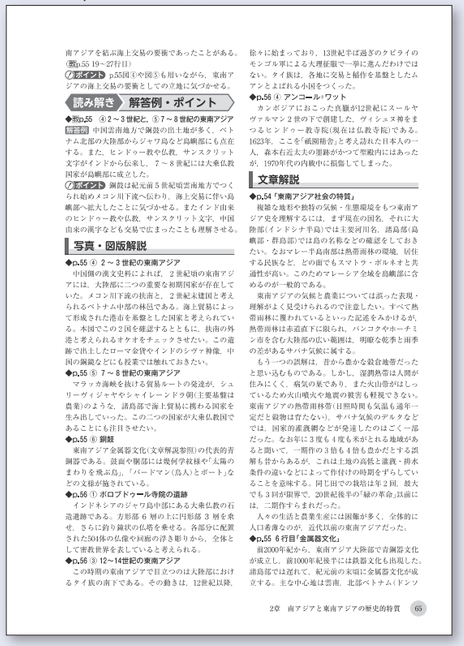
（1）指導資料

◆ 単元ごとに「指導内容の整理」「指導上のポイント」や各種問いの解答例・ポイント、授業を深める資料・本文の解説などを掲載しています。

⬇教科書 p.54-56 に対応したページの例①


教 p.54～56
2部 諸地域の歴史的特質の形成
2章 南アジアと東南アジアの歴史的特質
2節 東南アジアの社会と国家形成
単元のねらい ①東南アジアの歴史的特質を理解している。 ②東南アジアの特質について考察し、自分の言葉で表現している。
指導内容の整理 / 指導上のポイント
■東南アジア社会の特質
・大陸部（インドシナ半島）：サバナ気候（モンスーンの影響）
・諸島部（マレー半島、多島海）：熱帯雨林気候
森林地帯は香辛料・香木などの産物や資源が豊富
＊ただし、人間には厳しい多湿、自然災害
・海や河川を利用した水上交通網の発達
→商業の発達と人の移動、さまざまな宗教や文化の伝播
→外部に開かれた社会の形成
■海の道と初期国家の形成
・東南アジアの住民
過去数千年の間に中国方面から南下
→紀元前2000年代後半頃から稲作、金属器文化が広まる
・紀元前後、「海の道」による東西貿易開始
→港市・港市国家の出現→扶南（1 世紀～）・林邑（2 世紀末～）
■諸国の興亡と地域文化の形成
・インド文明の広がり
ヒンドゥー教・仏教（主に大乗仏教）・サンスクリット語などヴェルナ製は広がず
7～8 世紀、農業が発展している地域では宗教建築
7 世紀以降マラッカ海峡ルートの発達
→シュリーヴィジャヤ（中心の港市国家連合（7～8 世紀頃）
シャイレーンドラ朝（8～9 世紀頃）
＊ジャワ島にボロブドゥール寺院（大乗仏教寺院）建設
マジャパヒト朝（13 世紀末～16 世紀初め）
・大陸部の発展
カンボジア（真臓）：12～13 世紀最盛期、アンコール・ワット（ヒンドゥー教寺院）、アンコール・トム（首都）建設
ビルマ人統一王朝：パガン朝の成立（11 世紀）
タイ族国家の登場（13～14 世紀）
北部ベトナム：大越（李朝：11 世紀～、陳朝：13 世紀～）
中部ベトナム：チャンパー
・9 世紀以降は、独自の文化を生み出す動き
→ベトナムのチュノムや、各地の影響圧倒などの密接なつながりがあり、ヒンドゥー教や仏教、サンスクリット文字などを導入し、ヒンドゥー教や仏教の寺院も建設された。貿易による利益をめぐり当時の農業国家や港市国家との抗争が展開された。これらの背景には、東南アジア沿岸地域が東アジアと南アジアを結ぶ海上交易の要衝であったことがある。
教 p.55 19～22行目）
問い 解答例・ポイント
◎問 p.55 東南アジアの国家の特徴と、その背景を説明しよう。
解答例 東南アジアの国家の多くは、インド文明と
64 2部 諸地域の歴史的特質の形成

⬇教科書 p.54-56 に対応したページの例②


教 p.55 19～22行目）
ノ文化 p.55図1中図③も用いながら、東南アジアの海上交易の要衝としての立地に気づかせる。
読み解き 解答例・ポイント
◆問 p.55 ②2～3 世紀と、③7～8 世紀の東南アジア
解説 中国沿海地方で騒擾の出た地が多く、ベトナム北部の大陸部からジャワ島など島嶼部にも点在する。また、ヒンドゥー教や仏教、サンスクリット文字がインドから伝来し、7～8 世紀には大乗仏教国家が島嶼部に成立した。
ノ文化 p.55 騒擾は紀元前 5 世紀頃雲南地方でつくられ始めメコン川下流へ伝わり、海上交易に伴い島嶼部へ拡大したことに気づかせる。またインド由来のヒンドゥー教や仏教、サンスクリット文字、中国由来の漢字などを交易で広まったことも理解させる。
写真・図版解説
◆p.55 ② 2～3 世紀の東南アジア
中国側の漢文史料によれば、2 世紀頃の東南アジアには、大陸部に二つの重要な初期国家が存在していた。メコン川下流の扶南と、2 世紀末頃国と考えられるベトナム中部の林邑である。海上貿易によって形成された港市を基盤とした国家と考えられている。本国でこの2国を確認するとともに、扶南の外港と考えられるオケオをチェックさせたい。この遺跡で出土したローマ金貨やインドのシヴァ神像、中国の騒乱などにも授業では触れておきたい。
◆p.55 ③ 7～8 世紀の東南アジア
マラッカ海峡を抜ける貿易ルートの発達が、シュリーヴィジャヤやシャイレーンドラ朝（主要基盤は農業）のような、諸島部で海上貿易に携わる国家を生み出していった。この二つの国家が大乗仏教国であることにも注目させたい。
◆p.55 ④ 騒擾
東南アジア金属器文化（文章解説参照）の代表的青銅器である。鼓面や側面には幾何学紋様や「太陽のまわりを飛ぶ鳥」、「バードマン（鳥人）とボート」などの文様が施されている。
◆p.56 ① ボロブドゥール寺院の遺跡
インドネシアのジャワ島中部にある大乗仏教の石造建築である。方形部 6 層の上に円形部 3 層を乗せ、さらに釣り鐘状の仏塔を乗せる。各部分に配置された 504 体の仏像や回廊の浮き彫りから、全体として密教世界を表していると考えられる。
◆p.56 ③ 12～14 世紀の東南アジア
この時期の東南アジアで目立つのは大陸部におけるタイ族の南下である。その動きは、12 世紀以降、徐々に始まっており、13 世紀半ば過ぎのクビライのモンゴル軍による大理征服で一挙に進んだわけではない。タイ族は、各地に交易と結合を基盤とした小国をよばれる小国をつくった。
◆p.56 ④ アンコール・ワット
カンボジアにおこった真臓が 12 世紀にスールヤヴァルマン 2 世の下で創建した。ヴィシュヌ神をまつるヒンドゥー教寺院（現在は仏教寺院）である。1623年、ここを「祇園精舎」と考え訪れた日本人の一人、森本右近太夫の墨跡がかつて聖殿内にはあったが、1970年代の内戦中に損傷してしまった。
文章解説
◆p.54「東南アジア社会の特質」
複雑な地形や熱帯の気候・生態環境をもつ東南アジア史を理解するには、まず現在の国名、それに大陸部（インドシナ半島）では主要河川名、諸島部（島嶼部・群島部）では島の名称などの確認をしておきたい。なおマレー半島南部は熱帯雨林の環境、居住する民族など、どの面でもスマトラ・ボルネオと共通性が高い。このためマレーシア全域を島嶼部に含めるのが一般的である。
東南アジアの気候と農業については誤った表現・理解がよく見受けられるので注意したい。すべて熱帯雨林に覆われているといった記述をみかけるが、熱帯雨林は赤道直下に限られ、バンコクやホーチミン市を含む大陸部の広い範囲は、明瞭な乾季と雨季の差があるサバナ気候に属する。
もう一つの誤解は、昔から豊かな穀倉地帯だったと思い込むものである。しかし、湿潤熱帯は人間が住みにくく、病気の巣であり、また火山帯がはじっているため火山噴出や地震の被害も軽視できない。東南アジアの熱帯雨林帯（旧熱帯）も気温も通年一定だと窮屈は昔だない。サバナ気候のデルタなどでは、国家的灌漑網などが発達したのはごく一部だった。なお年に2度も 4 度も実がとれる地域があると聞いて、一期作の 3 倍も 4 倍も豊かだとする誤解も昔からあるが、これは土地の高低と灌漑・排水条件の違いなどによって作付けの時期をずらしていることを意味する。同じ田での栽培は年 2 回、最大でも 3 回が限界で、20世紀後半の「緑の革命」以前には、二期作すらおぼつかなかった。
人々の生活と農業生産には困難が多く、全体的に人口希薄なのが、近代以前の東南アジアだった。
◆p.55 6 行目「金属器文化」
前2000年紀から、東南アジア大陸部で青銅器文化が成立し、前1000年紀後半には鉄器文化も出現した。諸島部では遅れて、紀元前の末頃に金属器文化が成立する。主な中心地は雲南、北部ベトナム（ドンソ
2章 南アジアと東南アジアの歴史的特質 65

⬇教科書 p.211 ～ 212 に対応したページの例

教 p.211～212
結びつく世界 19世紀 イギリスの覇権と世界システム
授業での活用
1．覇権国家イギリスを国内の経済的支配を最の例として、教p.205のラテンアメリカ諸国の独立容認を結合する。その際のイギリスの主張が「自由貿易」であったことを認識させる。
2．「世界の工場」とよばれたイギリスの各地域との貿易内容を具体的に確認させる。またその貿易に関わる論議のイギリス側に、巨額の収入を得ていたことを気づかせる。
3．アジアに世界システムが拡大していく過程で、低開発され「周辺」に位置づけられた例として、教p.232～233を参照しつつインド社会の変容を理解させる。
広域地図の見方
イギリスの植民地は、19世紀の中頃までアフロ・ユーラシアではインドとケープ植民地には限定されていた。イギリスは、直接的な政治支配を避け、経済的支配を重視する「非公式帝国」をつくり上げた（インドも1857年までは、東インド会社の支配下にあった）。また17世紀中頃の航海法の制定以降、イギリスが海運国として発展し、19世紀には世界の物流を支配していたことは重要である。
文章解説
◆自由貿易帝国としてのイギリス
産業革命の進行は、産業資本家の政治的な発言力を増すことになった。労働者を安価に雇用したい産業資本家は、食料価格を維持して地主を保護する穀物法のような保護貿易政策に反対し、自由な貿易を求めた。また、「国富論」を著したアダム・スミスや「経済学および課税の原理」を著したデイヴィッド・リカードら、古典派経済学による自由貿易の理論化も進んだ。
そのような背景の下、1833年の東インド会社の商業活動停止および奴隷制度廃止、1846年の穀物法廃止、1849年の航海法の廃止などによって、イギリスは自由貿易主義を実現し、対外政策の柱として推進した。
しかし、イギリスによる自由貿易主義の実現は、必ずしも古典派経済学の思想の純粋な表現ではなかった。イギリスは、覇権国家としての圧倒的な経済的優位の下、政治的には独立を達成しながら経済的にはイギリスをはじめとするヨーロッパの大国に従属していたラテンアメリカのような地域に対しては、自由貿易主義を貫き、中国や日本に通商開港を要求する際には、管理貿易を絶例するレトリックとして自由貿易を持ち出したが、一方で、インドに対しては、1850年代の大反乱後に、これを政府による直接統治において植民地化した。自由貿易の背景的利益は、イギリスの帝国としての国益を正当化する道具でしかなかったのである。
このように、「可能ならば非公式の支配を通じた通商を、必要ならば公式の支配を通じての通商を」求める、19世紀のイギリス帝国主義の性格は、「自由貿易帝国主義」ともよばれる。
◆イギリス帝国とヒトのグローバリゼーション
一般に帝国は、人の移動の大きな流れに大きな影響を及ぼす。すでに19世紀以前において、イギリス帝国は、アフリカからカリブ海への奴隷貿易から大きな利益を得ていた。19世紀に入って、産業化が進むとともに奴隷貿易が廃止されると、イギリス帝国は、その植民地間で安価な労働力の調達を図るようになった。カリブ海地域には奴隷解放後にも引き続き労働力が流入したほか、インドから東アフリカおよび南アフリカへ、あるいは南太平洋の島々から オーストラリアへ といった流れが、それにあたる。帝国内の人の移動は、インドに生まれて、南アフリカで弁護士として活躍し、その後インドに帰国して独立運動を指導した、ガンディーのような人物も生んだ。
イギリスの覇権の下で産業化が進展する世界に生じた、新しい労働力移動の流れは、ヒトのグローバリゼーションの最初の波だということができる。
ただし、このヒトのグローバリゼーションの第 1 の波は、上述のような帝国による植民地間の労働力移動を含みつつ、基本的には中核から新たに開発の対象となった周辺へ向かうヒトの流れであったことに、留意が必要である。この波とは、第二次世界大戦終結後、労働力不足に陥るヨーロッパの中核諸国に向かって植民地を含む周辺諸国からの労働力移動の大きな流れが生じた、ヒトのグローバリゼーションの第 2 の波とは、対照的である。
◆世界システム論の基本構成：中核、半周辺、周辺
近代世界システム論は、非ヨーロッパ世界からヨーロッパ世界への経済的余剰の移転を、資本主義の本質的結果として強調し、資本主義的な世界経済の内部構成を中核・半周辺・周辺という概念でとらえようとする。資本主義的な世界経済における分業体制では、相対的に利潤率の高い産業と相対的に利潤率の低い産業とが、異なる地域に異なる割合で分
結びつく世界 227

⬇教科書の記述をさらに深める「論点」ページの例

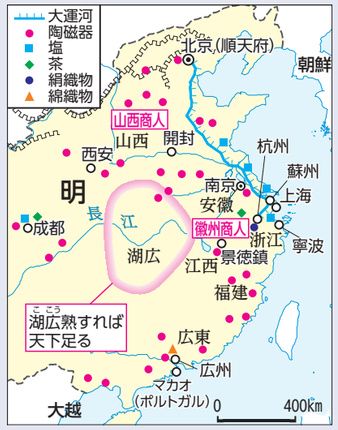
論点
「17世紀の危機」
16世紀を通じて拡大を続けたヨーロッパ世界システムは、1620年頃を境に急激に停滞の局面に入る。ヨーロッパ世界システム内の中軸を成す貿易、例えば、スペインのアメリカ大陸との貿易や東西ヨーロッパ間を結ぶバルト海貿易は停滞した。16世紀に増加していた人口の伸びも鈍化し、フランスやドイツでは、17世紀には減少に転じた。東欧では農村奴隷も みられた。物価も、ヨーロッパ全域で停滞ないし低下の傾向を示した。
「危機」は経済面だけではなく、政治や社会の領面でもみられ、17世紀のヨーロッパではたくさんの革命や反乱、クーデタが起こった。前世紀に強勢を誇ったスペインは、カタルーニャの反乱、ポルトガルの独立（1640年）といった反乱によって衰退が顕著となった。イギリスでも内戦と名誉革命があり、それらに前後してアイルランドやスコットランドで反乱が繰り返し起こった。フランスでも、貴族によるフロンドの乱による混乱が生じた。三十戦争の舞台となったドイツは荒廃した。ロシアではステンカ・ラージンが指導する農民反乱もあった。
こうした1620年代から1720年代にかけてのヨーロッパの「危機」の原因や歴史的意味については、多様な意見がある。最初に「危機」論を展開したホブズボームは、マルクス主義の歴史観に基づいて、なお「封建社会」の状態にあったヨーロッパ経済が、その限界に達して「全般的危機」であったと考えた。16世紀のヨーロッパでは、バルト海貿易などが大変盛んになったが、それは、東欧で「封建的な」領主が生産した穀物の取り引きをしていたということで、「封建的生産様式」の特内での発展に寄与するものであったのであり、1620年代には限界につきあたった。それこそが「危機」の本質であり、「危機」を脱するには、「市民革命」によって「封建的生産様式」を払拭し、ブルジョワが自由に活動できる社会をつくる必要があったが、それをなしとげたのはイギリスだけであった、という主張である。
これに対し、トレヴァー・ローパーなどの反対派は次のようにまえた。16世紀はルネサンスの世紀であり、上流階級の「ぜいたく」の時代であった。その結果、17世紀になるとヨーロッパの諸王室は、財政危機を迎えた。しかし、リシュリューやコルベールなど、有能な官僚を登用して財政改革に努めたフランス王室は生き延びたが、イギリス王室は財政改革の内閣構成を中核・半周辺・周辺という概念でとらえようとする。資本主義的な世界経済における分業体制では、相対的に利潤率の高い産業と相対的に利潤率の低い産業とが、異なる地域に異なる割合で分
「危機」をめぐるホブズボームとトレヴァー・ローパーのこの論争の背景には、かつてよく知られていた「ジェントリ論争」とよばれる論争があり、さらにその背景には、「ピューリタン革命」の性格をめぐる論争があった。「ジェントリ論争」は、絶対王ーニーが提唱した「ジェントリの勃興」という学説から引き起こされた。修道院解散によって大量の修道院領がジェントリの手に移っていった15世年から、「内戦」（イギリスでは「ピューリタン革命」と普通のことに表現する）の始まる1640年までの 1 世紀間に、長年、経営努力を せず、固定地代を とってきた伝統的な封建貴族が経済的に没落し、それに代べて商才に長けて「資本家的」な経営を行った「ジェントリ」が勃興した（その結果、彼らが政治権力を要求して「内戦」が起こったのであり、それゆえ、「内戦」は「ブルジョワ革命」であった）とする学説である。これに対して、トレヴァー・ローパーは、「ぜいたく」の中心である王室にポストを得た者の一族が、賄賂などで繁栄したのに対して、実権を握さ れながらそうした恩恵にあずかれなかった者が、議会派となって、これに抵 議したのが「内戦」だと考えたのである。ホブズボームは、その意味で、トーニーの学説を引き継いでいたといえる。
近年は、「危機」の背景に関して、国ごとの政治や経済の動きだけではなく、小氷期という当時の地球 寒冷化による農業生産への影響（凶作・飢きん）やそれに呼応するようなヨーロッパ各地での疫病（ペスト や天然痘などの流行などが重視されている。政治や経済の混乱に加えて、こうした生存の危機的状況 という社会不安から、ヨーロッパ各地で魔女狩りなどが引き起こされた。
「危機」の様相は、地域差も大きかった。ドイツが荒廃し、スペインが衰退していく一方で、オランダは 深刻な危機を まぬがれ、「黄金時代」とよばれる繁栄を謳歌した。当時奴隷貿易の主要商品に位置付 けられていたチェーリップの球根の価格が 暴落した「チューリップ恐慌」とよばれる経済の混乱がありました。こうした投機の加熱も、もしもオランダ経済が順調であったことを示すというべきである。当時、停滞・収縮状態にあった世界システムのなかで、より多くの分け前を確保していたオランダは、「近代世界システム」の最初の「覇権国家」であったとされる。
論点 187

（2）指導書 Web サポート

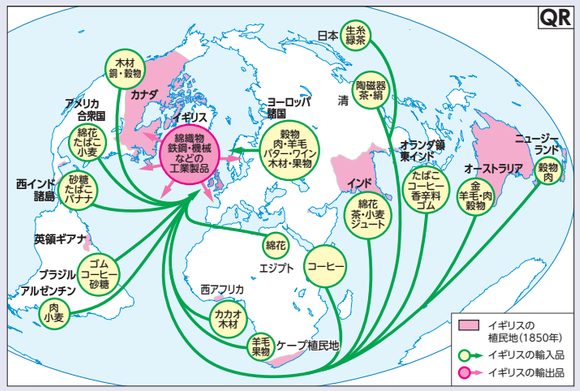
◆ 授業スライドや授業プリントなど、オリジナル教材の作成にも役立つデジタルコンテンツをご利用いただけるサービスです。
◆ 帝国書院ウェブサイトから会員ページにログイン後、アクセスキーをご入力いただくことで、コンテンツ一覧ページにアクセスできます。
◆ ご利用いただけるデジタルコンテンツは、下記の通りです。

① **授業スライド**（.pptx/Google スライド）
② **授業プリント**（.docx）
③ **見通し・振り返りシート**（.xlsx）
④ **特設ページワークシート**（.docx）
⑤ **評価問題例（テスト例）**（.docx）
⑥ **年間指導計画案・評価規準例**（.xlsx）
⑦ **指導内容の整理**（.txt）
⑧ **教科書紙面**（.pdf）
⑨ **教科書本文**（.txt）
⑩ **教科書掲載図版〈カラー / モノクロ〉**（.jpg）
⑪ **問い・まとめ・振り返りの解答例・ポイント**（.txt）
⑫ **『新詳 世界史探究 演習ノート』データ**（.docx）
⑬ **教科書 QR コンテンツ〈一問一答〉**（.xlsx）
⑭ **教科書 QR コンテンツ〈重要用語〉**（.xlsx）
⑮ **教科書 QR コンテンツ〈映像資料〉へのリンク**
⑯ **QR コンテンツの素材へのリンク**
⑰ **白地図集**（.jpg）
⑱ **参考文献**（.docx）

⬆⑧教科書紙面（.pdf）の例



⬅⑩教科書掲載図版〈カラー〉（.jpg）の例



⬆⑩教科書掲載図版〈カラー〉（.jpg）の例

⬆⑰白地図集（.jpg）の例

（1）指導資料

内容をCheck!

◆単元ごとに構成しています。前半には授業展開例として、板書事項などを示した「指導内容の整理」や「指導上のポイント」を記載、後半には資料・本文の解説や問いの「解答例・ポイント」などを記載しています。

⬇教科書 p.54-56 に対応したページの例①

教 p.54～56

2部　諸地域の歴史的特質の形成
2章　南アジアと東南アジアの歴史的特質

2節　東南アジアの社会と国家形成

単元のねらい
①東南アジアの歴史的特質を理解している。
②東南アジアの特質について考察し，自分の言葉で表現している。

指導内容の整理	指導上のポイント
■東南アジア社会の特質 ・**大陸部**(インドシナ半島)：サバナ気候(**モンスーン**の影響) ・**諸島部**(マレー半島，多島海)：熱帯雨林気候 森林地帯は**香辛料・香木**などの産物や資源が豊富 ＊ただし，人間には厳しい多湿，自然災害 ・海や河川を利用した**水上交通網**の発達 →商業の発達と人の移動，さまざまな宗教や文化の伝播 →外部に開かれた社会の形成 **■海の道と初期国家の形成** ・東南アジアの住民 過去数千年の間に中国方面から南下 →紀元前2000年代後半頃から稲作，金属器文化が広まる ・紀元前後，「**海の道**」による東西貿易開始 →**港市**・港市国家の出現…扶南(1世紀～)・林邑(2世紀末～) **■諸国の興亡と地域文化の形成** ・インド文明の広がり ヒンドゥー教・仏教(主に大乗仏教)・サンスクリット語など ヴァルナ制は根づかず 7～8世紀，農業が発展している地域では宗教建築 7世紀以降マラッカ海峡ルートの発達 →**シュリーヴィジャヤ**中心の港市国家連合(7～8世紀頃) **シャイレーンドラ朝**(8～9世紀頃) ＊ジャワ島に**ボロブドゥール寺院**(大乗仏教寺院)建設 **マジャパヒト朝**(13世紀末～16世紀初め) ・大陸部の発展 **カンボジア**(真臘)：12～13世紀最盛期，**アンコール=ワット**(ヒンドゥー教寺院)，**アンコール=トム**(首都)建設 ビルマ人統一王朝：**パガン朝**の成立(11世紀) タイ族国家の登場(13～14世紀) 北部ベトナム：**大越**(李朝：11世紀～，**陳朝**：13世紀～) 中部ベトナム：チャンパー ・9世紀以降は，独自の文化を生み出す動き →ベトナムのチューノムや，各地の影絵芝居など	**中学校・歴史総合との関連** 中学校社会地理的分野では，東南アジアの地形や気候，農業形態について学習している。中学校社会歴史的分野での既習事項はほぼない。 **発問例①** 東南アジアに外来の宗教や文化が伝播した環境的な要因は何か。 **ポイント①** 豊富な資源と水上交通の発達により，商業活動が盛んとなり，それに伴いさまざまな外来宗教や文化が伝播したことに気づかせる。 **発問例②** シュリーヴィジャヤは，7～8世紀になぜ大きな力をもったのか。 **ポイント②** シュリーヴィジャヤなどが支配した海峡地帯は，東西交易の中継拠点であり，島嶼部の熱帯産品の集産地でもあることに気づかせる。 **発問例③** なぜ，大越(陳朝)ではチューノムとよばれる民族文字が生まれたのか。 **ポイント③** 日本でもそうであったように，10世紀に唐が滅亡し，それ以降周辺地域で「国風文化」が育まれたことに触れる。(教p.126～127にも関連させる)

問い　解答例・ポイント

Q 教p.55 東南アジアの国家の特徴と，その背景を要約しよう。

解答例 東南アジアの国家の多くは，インド文明との密接なつながりがあり，ヒンドゥー教や仏教，サンスクリット文字などを導入し，ヒンドゥー教や仏教の寺院も建設された。貿易による利益をめぐり内陸の農業国家や港市国家との抗争が展開された。これらの背景には，東南アジア沿岸地域が東アジアと南アジアを結ぶ海上交易の要衝であったことがある。(教p.55 19～27行目)

ポイント p.55図④や図⑤も用いながら，東南アジアの海上交易の要衝としての立地に気づかせる。

⬇教科書 p.54-56 に対応したページの例②

読み解き　解答例・ポイント

◆教p.55　④2～3世紀と，⑤7～8世紀の東南アジア

解答例 中国雲南地方で銅鼓の出土地が多く，ベトナム北部の大陸部からジャワ島など島嶼部にも点在する。また，ヒンドゥー教や仏教，サンスクリット文字がインドから伝来し，7～8世紀には大乗仏教国家が島嶼部に成立した。

ポイント 銅鼓は紀元前5世紀頃雲南地方でつくられ始めメコン川下流へ伝わり，海上交易に伴い島嶼部へ拡大したことに気づかせる。またインド由来のヒンドゥー教や仏教，サンスクリット文字，中国由来の漢字なども交易で広まったことも理解させる。

写真・図版解説

◆p.55 ④ 2～3世紀の東南アジア

中国側の漢文史料によれば，2世紀頃の東南アジアには，大陸部に二つの重要な初期国家が存在していた。メコン川下流の扶南と，2世紀末建国と考えられるベトナム中部の林邑である。海上貿易によって形成された港市を基盤とした国家と考えられている。本図でこの2国を確認するとともに，扶南の外港と考えられるオケオをチェックさせたい。この遺跡で出土したローマ金貨やインドのシヴァ神像，中国の銅鏡などにも授業では触れておきたい。

◆p.55 ⑤ 7～8世紀の東南アジア

マラッカ海峡を抜ける貿易ルートの発達が，シュリーヴィジャヤやシャイレーンドラ朝(主要基盤は農業)のような，諸島部で海上貿易に携わる国家を生み出していった。この二つの国家が大乗仏教国であることにも注目させたい。

◆p.55 ⑥ 銅鼓

東南アジア金属器文化(文章解説参照)の代表的青銅器である。鼓面や胴部には幾何学紋様や「太陽のまわりを飛ぶ鳥」，「バードマン(鳥人)とボート」などの文様が施されている。

◆p.56 ① ボロブドゥール寺院の遺跡

インドネシアのジャワ島中部にある大乗仏教の石造遺跡である。方形部6層の上に円形部3層を乗せ，さらに釣り鐘状の仏塔を乗せる。各部分に配置された504体の仏像や回廊の浮き彫りから，全体として密教世界を表していると考えられる。

◆p.56 ③ 12～14世紀の東南アジア

この時期の東南アジアで目立つのは大陸部におけるタイ族の南下である。その動きは，12世紀以降，徐々に始まっており，13世紀半ば過ぎのクビライのモンゴル軍による大理征服で一挙に進んだわけではない。タイ族は，各地に交易と稲作を基盤としたムアンとよばれる小国をつくった。

◆p.56 ④ アンコール=ワット

カンボジアにおこった真臘が12世紀にスールヤヴァルマン2世の下で創建した，ヴィシュヌ神をまつるヒンドゥー教寺院(現在は仏教寺院)である。1623年，ここを「祇園精舎」と考え訪れた日本人の一人，森本右近太夫の墨跡がかつて聖殿内にはあったが，1970年代の内戦中に損傷してしまった。

文章解説

◆p.54「東南アジア社会の特質」

複雑な地形や独特の気候・生態環境をもつ東南アジア史を理解するには，まず現在の国名，それに大陸部(インドシナ半島)では主要河川名，諸島部(島嶼部・群島部)では島の名称などの確認をしておきたい。なおマレー半島南部は熱帯雨林の環境，居住する民族など，どの面でもスマトラ・ボルネオと共通性が高い。このためマレーシア全域を島嶼部に含めるのが一般的である。

東南アジアの気候と農業については誤った表現・理解がよく見受けられるので注意したい。すべて熱帯雨林に覆われているといった記述をみかけるが，熱帯雨林は赤道直下に限られ，バンコクやホーチミン市を含む大陸部の広い範囲は，明瞭な乾季と雨季の差があるサバナ気候に属する。

もう一つの誤解は，昔から豊かな穀倉地帯だったと思い込むものである。しかし，湿潤熱帯は人間が住みにくく，病気の巣であり，また火山帯がはしっているため火山噴火や地震の被害も軽視できない。東南アジアの熱帯雨林帯(日照時間も気温も通年一定だと穀物は育たない)，サバナ気候のデルタなどでは，国家的灌漑網などが発達したのはごく一部だった。なお年に3度も4度も米がとれる地域があると聞いて，一期作の3倍も4倍も豊かだとする誤解も昔からあるが，これは土地の高低と灌漑・排水条件の違いなどによって作付けの時期をずらしていることを意味する。同じ田での栽培は年2回，最大でも3回が限界で，20世紀後半の「緑の革命」以前には，二期作すらまれだった。

人々の生活と農業生産には困難が多く，全体的に人口希薄なのが，近代以前の東南アジアだった。

◆p.55 6行目「金属器文化」

前2000年紀から，東南アジア大陸部で青銅器文化が成立し，前1000年紀後半には鉄器文化も出現した。諸島部では遅れて，紀元前の末頃に金属器文化が成立する。主な中心地は雲南，北部ベトナム(ドンソ

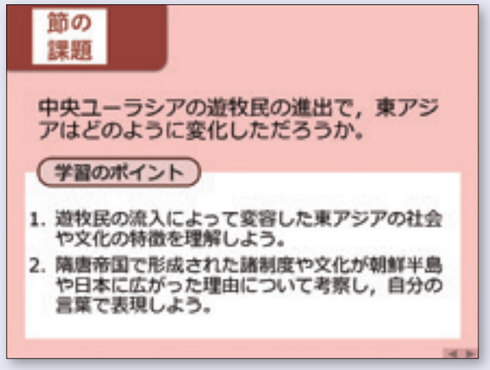
（2）指導書Webサポートコンテンツ ①授業スライド

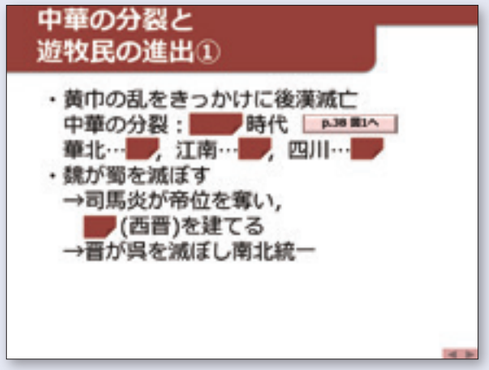
内容をCheck!

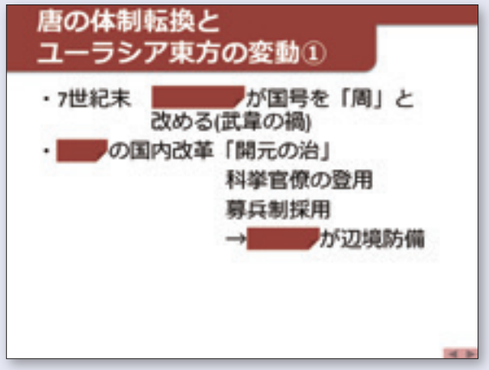
◆オリジナル教材の作成にも便利な PowerPoint ファイルです。2023 年 6 月から Google スライド版もご利用いただけます。

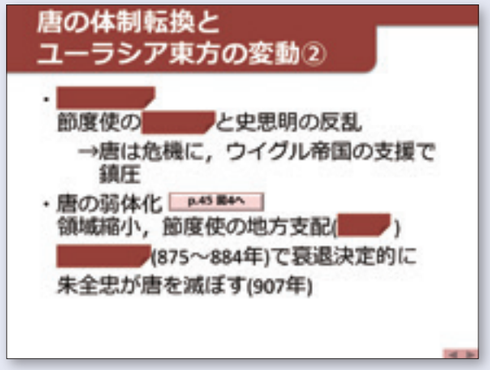
◆付せん部分は、スライドショーで順に外れるように作成しています。

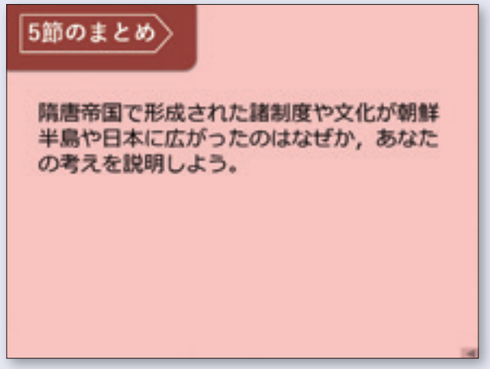
⬇教科書 p.38-45 に対応した授業スライドの例（一部分を抜粋）











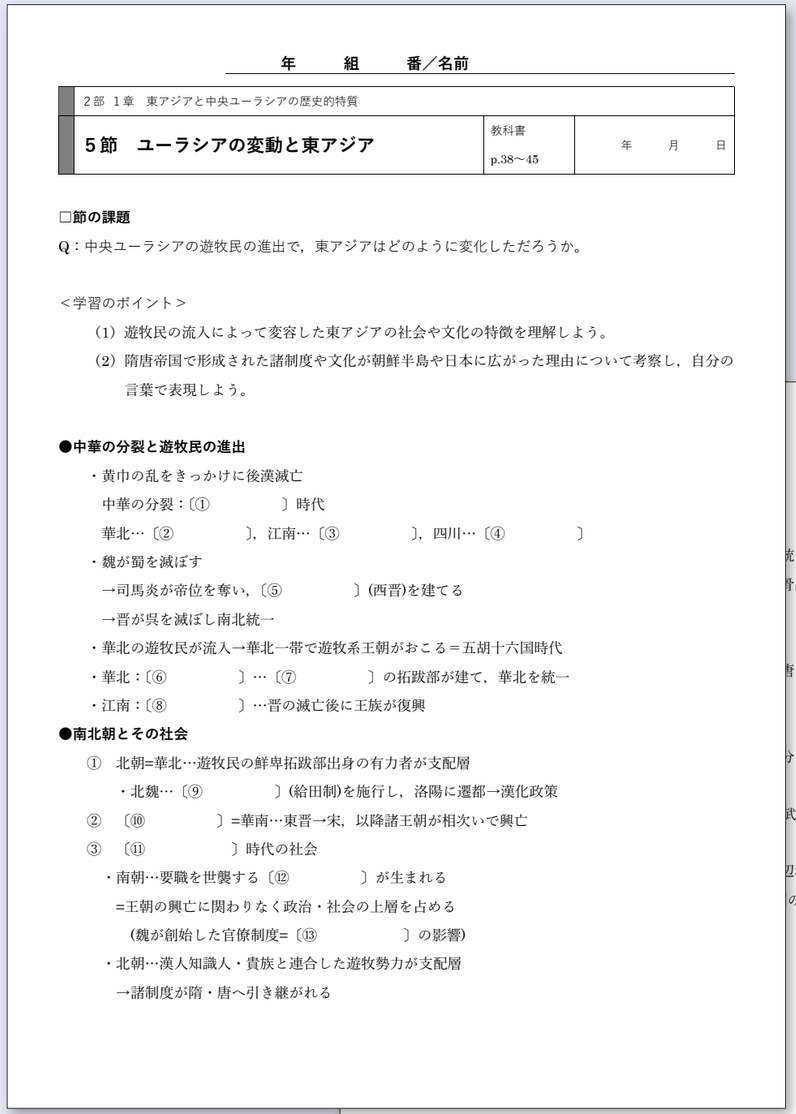
（2）指導書Webサポートコンテンツ ②授業プリント

内容をCheck!

◆オリジナル教材の作成にも便利な Word ファイルです。

◆授業スライド（本冊子 p.6）の付せん部分の重要用語を、穴埋めにした授業用プリントです。

⬇教科書 p.38-45 に対応したプリントの例（生徒用、一部分を抜粋）



年　　組　　番／名前

2部 1章 東アジアと中央ユーラシアの歴史的特質		
5節　ユーラシアの変動と東アジア	教科書 p.38～45	年　月　日

□節の課題

Q：中央ユーラシアの遊牧民の進出で，東アジアはどのように変化しただろうか。

＜学習のポイント＞

（1）遊牧民の流入によって変容した東アジアの社会や文化の特徴を理解しよう。

（2）隋唐帝国で形成された諸制度や文化が朝鮮半島や日本に広がった理由について考察し，自分の言葉で表現しよう。

●中華の分裂と遊牧民の進出

・黄巾の乱をきっかけに後漢滅亡

中華の分裂：〔①　　〕時代

華北…〔②　　〕，江南…〔③　　〕，四川…〔④　　〕

・魏が蜀を滅ぼす

→司馬炎が帝位を奪い，〔⑤　　〕(西晋)を建てる

→晋が呉を滅ぼし南北統一

・華北の遊牧民が流入→華北一帯で遊牧系王朝がおこる＝五胡十六国時代

・華北：〔⑥　　〕…〔⑦　　〕の拓跋部が建て，華北を統一

・江南：〔⑧　　〕…晋の滅亡後に王族が復興

●南北朝とその社会

①　北朝=華北…遊牧民の鮮卑拓跋部出身の有力者が支配層

・北魏…〔⑨　　〕(給田制)を施行し，洛陽に遷都→漢化政策

②　〔⑩　　〕=華南…東晋→宋，以降諸王朝が相次いで興亡

③　〔⑪　　〕時代の社会

・南朝…要職を世襲する〔⑫　　〕が生まれる

=王朝の興亡に関わりなく政治・社会の上層を占める

(魏が創始した官僚制度=〔⑬　　〕の影響)

・北朝…漢人知識人・貴族と連合した遊牧勢力が支配層

→諸制度が隋・唐へ引き継がれる

〕・〔㊴　　〕の派遣

統一(676 年)

骨品制

唐の統治制度・思想体系導入

分け

武韋の禍)

辺境防備

の反乱

〕)

□５節のまとめ

Q：隋唐帝国で形成された諸制度や文化が朝鮮半島や日本に広がったのはなぜか，あなたの考えを説明しよう。

新詳 世界史探究 演習ノート

定価：700 円（本体 636 円＋税）
判型：B5 判　　ページ数：178 ページ
内容：教科書に完全準拠した構成で授業をサポートします。
　　　デジタル版もご用意しております。（→本冊子 p.10-11）

※『新詳 世界史探究 指導資料 Web サポートコンテンツ付』をご購入いただくと、指導書 Web サポートで準拠ノートの Word ファイルをダウンロードいただけます。

⬇教科書 p.54-56 に対応したページの例（生徒用）

2 東南アジアの社会と国家形成

【教科書p.54〜56】

海の道と初期国家の形成

・初期国家の形成 … 前2000年代後半ごろから稲作や金属器文化が広まっていた
　紀元前後 … 「[　1　]」による東西貿易の開始 ⇒ 中継地，輸出産物の宝庫に
　　　貿易による富の蓄積，外来文明との接触 ⇒ 都市と国家が出現
　　　マレー半島や大陸部沿岸の[　2　]と港市国家
　港市群と内陸諸勢力が連合した大国の出現
　　メコンデルタ本拠の[　3　]・ベトナム中部沿岸の[　4　]（後のチャンパー）
　華南・雲南や北部ベトナム … 国家形成が秦・漢代の中国の南進によりつぶされる

諸国の興亡と地域文化の形成

・インド文明の導入（4～5世紀以後）⇒ 7～8世紀，ヒンドゥー教や仏教の寺院を築く
・**諸島部** … [　5　]海峡を抜ける交易ルートが発達 ⇒ 強国の出現（7世紀以後）
　7世紀半ば … [　6　]（スマトラ島）を中心とする港市国家連合 ⇒ [5]海峡を支配
　8世紀半ば … [　7　]**朝**（ジャワ島中部の農業国家）
　　⇒ 大乗仏教が広まり，ジャワ島に[　8　]**寺院**が築かれる
　10世紀以降 … [　9　]（三仏斉）を中心とする港市国家連合が栄える
　　　ジャワ島東部 … 諸王朝がマルク（モルッカ）諸島の香辛料，ジャワ島の胡椒を輸出して勢力伸ばす
　　　⇒ 14世紀，[　10　]**朝**がインドネシア群島のほぼ全域を影響下に
・**大陸部**
　[　11　]（真臘）… クメール人，9世紀から強大化
　　最盛期（12～13世紀）：ヒンドゥー教寺院[　12　]，都城[　13　]建設
　[　14　]**朝** … 南下したビルマ人がエーヤワディー川中流部に建国 ⇒ 海岸部に進出
　[　15　]族 … 13～14世紀，大陸北部で勢力拡大 ⇒ 各地に国家を建てる
　[　16　] … 北部ベトナムで10世紀に中国から独立 ⇒ [　17　]朝以後に発展
　　　中部ベトナムのチャンパーと争う
　　　[　18　]**朝** … モンゴルの侵攻を撃退 ⇒ 民族意識を高める
・13～14世紀までに形成された独自の古典文化 ⇒ 各国の古典時代として記憶される

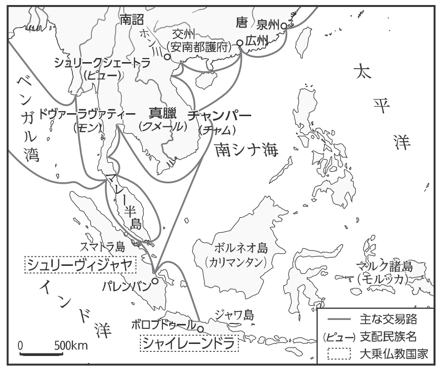
確認 空欄に適語を記入しよう。

1	
2	
3	
4	
5	
6	
7	
8	
9	
10	
11	
12	
13	
14	
15	
16	
17	
18	

チャレンジ読解力UP　**東南アジアの仏教**

(1) 右の図を見て，次の問いに答えよう。
　① 次の文の(　　)に当てはまるものを選び，丸をつけよう。
　　スマトラ島のシュリーヴィジャヤは，(　大乗仏教　・　上座仏教　)の国家で，(　農業国家　・　港市国家連合　)として繁栄した。
　② ジャワ島のボロブドゥールには，大きな仏教寺院の遺跡があり，近くのヒンドゥー教寺院群とも共存していた。このような仏教やヒンドゥー教の寺院が建立された理由を説明しよう。
　(　　　　　　　　　　　　　　　　)

図　7～8世紀の東南アジア



⬇世界各地のつながりをまとめた年表「同時代のつながり」の、教科書 p.213-221 に対応したページの例（生徒用）

同時代のつながり⑨

● ヨーロッパに広がる国民国家

◎流れ図を見る視点　　【教科書p.213〜221】
1．ウィーン体制の成立とその崩壊から国民国家形成が始まることを確認しよう。
2．西欧各国の状況を正確に把握しよう。

（列：オーストリア／プロイセン（ドイツ）／フランス／ロシア／イギリス／ギリシア・イタリア他）

ウィーン体制の確立

1814〜15 ①＿＿＿＿ 開催
・ウィーン議定書調印 ⇨ **ウィーン体制の成立**
　1814 ②＿＿＿＿ 復活[〜30]
・1815　神聖同盟成立…君主間の同盟　政治的効力なし（イギリス・オスマン帝国・ローマ教皇以外のヨーロッパ君主による）
1815 ③＿＿＿＿ 成立
↑1818　フランスが参加　**五国同盟**に発展
ギリシアを支援 →

- オーストリア：ギリシア独立戦争…オスマン帝国支援→中立
- フランス：【ルイ18世】[位1814〜24]
- ロシア：【ニコライ1世】[位1825〜55]　専制政治
- イギリス：1822　カニングが外相に→自由主義が広がる
- ギリシア・イタリア他：1821 ㉖＿＿＿＿ 独立戦争[〜29]／1820〜21　カルボナリ（炭焼き職人）蜂起（伊）→墺軍が鎮圧

体制の動揺

- プロイセン（ドイツ）：1815 ④＿＿＿＿（学生同盟）運動→弾圧／1834 ⑤＿＿＿＿ 発足（プロイセン主導）
- フランス：【⑥＿＿＿＿】[位1824〜30]→自由主義弾圧／1830.7 ⑦＿＿＿＿　**七月王政[1830〜48]**／オルレアン公【⑧＿＿＿＿】[位1830〜48]　選挙法改正運動弾圧
- ロシア：1825 ⑳＿＿＿＿（十二月党の乱）
- 影　響 →
- ギリシア・イタリア他：1829 ㉖独立／・ラテンアメリカの独立（10〜20年代）
- 1830 ㉗＿＿＿＿ 独立宣言／1830〜31　ポーランド独立運動→鎮圧

影　響

体制の崩壊

- オーストリア：1848.3 ⑩＿＿＿＿／・チェコ人の民族運動…オーストリア軍鎮圧／・ハンガリー独立運動[1848〜49]…オーストリア・ロシア連合軍により弾圧
- プロイセン（ドイツ）：1848.3 ⑩＿＿＿＿／1848〜49 ⑫＿＿＿＿→プロイセン国王戴冠拒否／◎首相 ⑬＿＿＿＿ の鉄血政策
- フランス：1848.2 ⑨＿＿＿＿→ヨーロッパに波及／［⑪＿＿＿＿］**第二共和政[1848〜52]**／1848.6　六月暴動／**第二帝政[1852〜70]**【⑯＿＿＿＿】[位1852〜70]
- ロシア：㉑＿＿＿＿[1853〜56]…敗北→㉒＿＿＿＿失敗／【㉓＿＿＿＿】[位1855〜81]→自由主義的改革／1861　農奴解放令／ポーランド反乱を契機に反動化／㉔＿＿＿＿ の運動　→弾圧／1877〜78 ㉕＿＿＿＿
- イタリア：1831 ㉘＿＿＿＿ が「青年イタリア」結成／◎サルデーニャの台頭…首相㉙＿＿＿＿ の活躍／1849 ㉘らが ㉚＿＿＿＿ 建設→フランス軍が半年たらずで打倒／1859　イタリア統一戦争／㉛＿＿＿＿ が千人隊を組織／1861　イタリア王国成立…【㉜＿＿＿＿】即位[位1861〜78]／1866　プロイセンと同盟／⑭…㉝＿＿＿＿ 併合／1870 ⑰…教皇領編入／◎［㉞＿＿＿＿］問題残る

負 ← 1866 ⑭＿＿＿＿ → 勝
1867 ⑮＿＿＿＿ 成立…ハンガリーに自治権
勝 ← 1870〜71 ⑰＿＿＿＿ → 負
- プロイセン（ドイツ）：1871　ドイツ帝国成立　プロイセン王【⑱＿＿＿＿】皇帝に即位
- フランス：帝政崩壊→臨時政府　パリ民衆と対立／1871.3 ⑲＿＿＿＿ 樹立／**第三共和政[1870〜1940]**

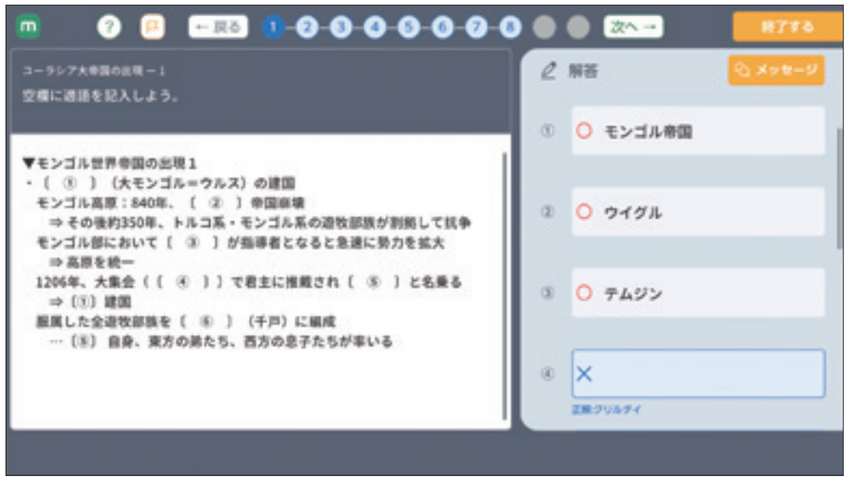
デジタル準拠ノート 新詳 世界史探究

定価：980 円（本体 891 円＋税） 品番：59151 / セット版(書籍＋デジタル)1,480円(本体1,345円+税) 品番:59171

内容：（1）教科書準拠ノートをタブレット用に再構成、正誤の自動判定機能を搭載しています。
（2）資料の読み解き問題や演習問題を収録しています。
（3）先生用管理ページで、生徒の学習進捗状況を確認できます。
（4）作問ツールで先生が問題を作成、配信もできます。

生徒向け機能

教科書準拠の問題にタブレットで取り組める



◆タブレットに直接入力することで解答できます。

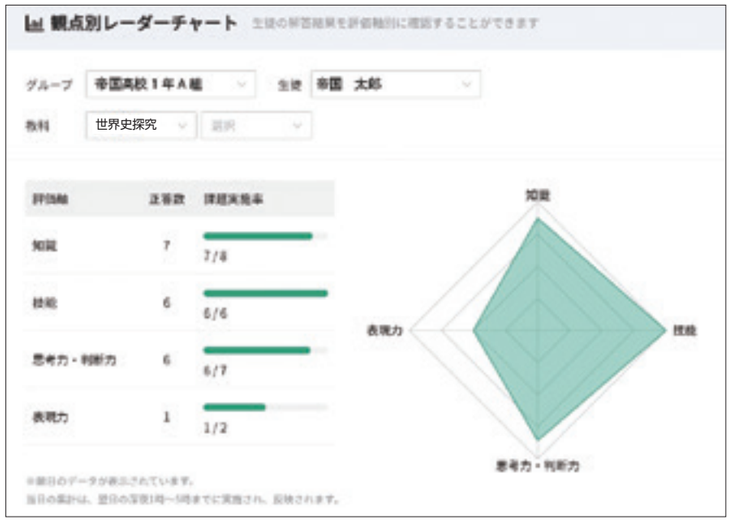
解答は自動で正誤判定、繰り返し学習できる

◆解答は基本的に自動で正誤判定されるので、先生のご負担軽減にもつながります。（記述問題は自己採点形式）

◆繰り返し何度も演習することができるため、基礎知識の確実な定着が図れます。

先生向け機能

評価をアシスト



◆生徒ごとに課題の提出状況を確認できるほか、解答結果を自動集計できます。また、各問題に埋め込まれている評価軸（タグ）をもとに、正答率を自動集計してグラフ表示できる「観点別レーダーチャート」など、生徒の学習状況を“見える化”できる機能が充実しています。

指導をアシスト

←デジタル準拠ノート（イメージ）紙面は明解歴史総合の例

◆既存の問題だけではなく、先生が独自に問題を作れる「作問ツール」も収録。出題形式や評価軸（タグ）も任意に設定できるほか、「指導書 Web サポート」（別売、→本冊子 p.3）収録の教科書掲載図版や先生がお持ちの画像を取り込んで作問に活用することもできます。作成した問題を生徒に配信することも可能です。

◆単元ごとに、公開・非公開や提出期限の設定を行えます。

令和５(2023)年度以降用

新課程用教科書のご案内

教科書の内容、指導資料、関連教材、シラバス作成用資料等、新課程教科書に関するあらゆる情報を掲載！

高等学校新課程情報サイト▲

地図 -702

新詳高等地図

新しくて、詳しい！
高等学校地図帳の
決定版

AB 判　194 ページ

地図 -703

標準高等地図

見やすくて、
使いやすい！
大判地図帳

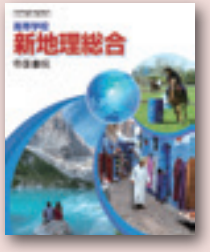
A4 判　172 ページ

地総 -703

高等学校 新地理総合

暮らしが見える！
“今”がわかる！
技能が身に付く！
地理総合教科書の決定版

AB 判　238 ページ

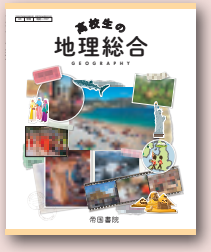


地総 -707

高校生の地理総合

おもしろい！わかりやすい！
ためになる！
くらしが見える教科書

AB 判　234 ページ



歴総 -706

明解 歴史総合

おもしろい！わかりやすい！
ためになる！
「世界史×日本史」
新しい歴史に出会える教科書

AB 判　238 ページ

公共 -707

高等学校 公共

社会がわかる！
課題と向き合う！未来をつくる！
社会に参画する
力を養う教科書

AB 判　238 ページ

地探 -702

新詳 地理探究

新しい、詳しい、
理解しやすい！
地理探究教科書の決定版

B5 判　346 ページ

世探 -703

新詳 世界史探究

通史と同時代史を
バランスよく記述！
現代世界の成り立ちが
わかりやすい教科書

B5 判　366 ページ

帝国書院

〒 101-0051　東京都千代田区神田神保町 3-29
TEL　03-3262-4795 (代)
URL　https://www.teikokushoin.co.jp/